

# ケアがはじまる——《痴呆性老人の世界》讚

田中 晋平

撮影のために訪れた熊本の病院で、数十人もの痴呆のお年よりに囲まれたときには言葉を失った。「人間が年をとると、こんなことになるのか……」。まるで谷に突き落とされたような絶望的な気持ちになり、とても映画をつくれる気分ではなかった<sup>1</sup>。

大手製薬会社から認知症の介護についての学術映画をつくりたいとの依頼が岩波映画製作所に入り、既に同社を退職していたが呼び出された羽田澄子は、はじめて認知症の老人たちの取材で病院を訪れた時の衝撃を、さまざまな場で語っている。その後、岩波映画の歴史に刻まれるヒット作となり、1985年度キネマ旬報ベストテン文化映画部門1位などを受ける《痴呆性老人の世界》の出発点は、この絶望にあった。さらに言えば、《安心して老いるために》(1990年)やビデオで撮影された北欧、オーストラリアの老人ケアシステムを取材したドキュメンタリー、《終りよければすべてよし》(2006年)など、終末期の生と向き合った後の羽田による一連のドキュメンタリーも含め、上記の映画を作れるとは到底思い至れない体験に遡れるのである。

映像作家の戸惑いは、《痴呆性老人の世界》の画面にも痕跡を残している。たとえば映画の前半、大きな風呂敷包みを背負った老女が、子どもや孫たちのいる自宅に帰るのだと

言い、徘徊する場面。しばらく建物から出られないままにすると、閉じ込められた!と騒ぐこともあり、時に看護師が付き添い、病院の外へ出歩くことが受け入れられている。細い道や荒地を寄るべなく進む二人の姿を、映画のカメラもまた不用意に距離を詰めることなく追う。しばらくあちこちを歩いた後、見つからないので家の人に迎えに来てもらおう、と老女に伝え、一旦その提案に納得してもらって病院に戻る。だが、看護師が家族に電話をかけ一段落かと思いきや、帰りますとまた老女が立ち上がり、廊下を歩きはじめる。この不確実な状況で、映画のカメラも撮るべきものを見失わぬよう、所在なく揺れ続ける。

認知症の高齢者を前に当惑し、言葉を失っていたのは、羽田たちだけではない。それは戦後に平均寿命が格段に延び、既に1970年代から高齢化社会に突入していた日本人が、バブル景気に浮かれる水面下で目撃していた光景だった。現在のような脳神経画像技術の発展もなく、抗認知症薬の認可や介護保険制度の導入よりもはるか以前に発表された《痴呆性老人の世界》が、当時大きな反響を得た要因を、羽田も「みんな他人事じゃないと思って見てるでしょ」<sup>2</sup>と述べている。こうした状況下で制作された本作は、認知症とその介護のあるべき姿とは何か、専門家の指導を得ながらも、明確な答えが与えられないまま、撮影をスタートせざる



《痴呆性老人の世界》 写真提供：国立映画アーカイブ

をえなかったはずである（なお本作の公開と同年、認知症および尊厳死の問題を取り上げた、吉田喜重監督の《人間の約束》が発表されている）。しかし、その不確実な、容易に答えの与えられない状況からこそ、「ケアする映画」の実践が生まれるのだと思われる。

では改めて、「ケア」とはどのような営みなのか。本上映会の案内にも明示したとおり、それは看護や介護、福祉、保育の現場のみならず、生存に関与するあらゆる空間で実践されているものだが、ここでは反転させて「ケア」がどのような営みではないのかを併せて考えよう。医療人類学者のアネマリー・モルは、個人が健康のためにより良い選択を行うのを推奨する「選択のロジック」と、一人一人の生を、他者やモノとの関係のなかで捉え、試行錯誤を続けながら状況を改善していく「ケアのロジック」を対照化する<sup>3</sup>。「選択のロジック」では、一方的に医療を患者が受けるのではなく、与えられた情報から、どのような治療や介護サービスなどを受けるか、合理的判断を行う主体として、患者を位置付ける。それは人々が社会の中で自律した個人として健康に配慮し、治療法や薬剤、治療機器などを選ぶ消費者として振る舞うことを推奨する。だが、一見リベラルにみえるこのロジックは、容易に想像できるように、与えられる説明が十分かどうか、管理された範囲でしか患者に選択肢が設定されないのではないかと、といった問題を避け得ない（にもかかわらず選択の結果は自己責任に帰される）。そもそも患者となったり、ケアを受けねばならない状況下で、冷静な判断や意思表示は困難である。選択の主体になりたくてもなれない存在、マイノリティや子ども、老人らの個別の生から発せられる声を、置き去りにする危うさも「選択のロジック」に付きまとうだろう。対して「ケアのロジック」では、患者が選択したサービスのみを提供するのではなく、ケアを受ける一人一人の状態をより良いものに保つためにできることを考え、実践していく。ある個人の身体の状態を改善するために何が必要か、答えの与えられていない不確実な状況でも、ケアを与える者と与えられる者が共に問い、調整を繰り返す。つまりケアは、匿名的で、一律に提供されるサービスであってはならず、目の前の他者の生と関わり合う、オープンエンドな営みと言える。

「ケアのロジック」は、市場原理に覆われたわれわれの社会のなかでも、そこかしこに息衝いている。《痴呆性老人の

世界》の画面に現れる老人と病院内での介護の様子からもその具体例を挙げられる。先程の徘徊する老女に付き添っていた看護師のように、老人を強制的に病院に連れ戻すのではなく、「説得」はできぬまでも、家族に来てもらおうという提案に「納得」してもらおうという対応も、その一つだろう。病院内で週二回実施されるお風呂の時間に重なるナレーションでも、当初は短く管理されたスケジュールで入浴が行われていたため不評だったが、それぞれの老人のペースに合わせるかたちに変更されたというエピソードが語られる。一日たっぷり時間を設け、寝たきりでも気持ちよく入浴できるよう介助を工夫したことで、老人たちの楽しみに変わった（断りたい事情があれば入浴しなくてもよい）。そして、「残る能力を生かす」というスローガンのもと、食事などの日常的な行為は、可能な限り自身で行なうことが推奨されるし、院内の細々とした作業にも手を貸してもらう。生活の全てをサポートするわけではなく、それぞれの老人に何ができるのか、したいのか、そのために好ましいモノの配置や環境を築こうとする細やかなまなざしがあり、現場で調整が繰り返されている様子が示される。認知症の老人たちは、選択の主体として振る舞うことが難しいにせよ、単に受動的なわけではなく、ケアの場ではその能動性や感情に配慮することも求められるのだ。

他にも《痴呆性老人の世界》が捉えているケアの事例は挙げられるが、病院を訪れた羽田たち映画クルーもまた、認知症の人々の世界に分け入りながら、老人たちの生活を脅かさないうえ、さまざまな配慮を行っていた。まず、病院で暮らす人々に違和感をもたさないうえ、羽田たちはみな、白い看護衣を着て撮影に臨んだ（映像にも映り込んでいる）。病院内での老人たちの会話を、不要な介入を行わずに聞き取るため、録音部の滝澤修が特製の長いハンドグリップをつくり、遠くの間でも音を録る方法が編み出された<sup>4</sup>。さらにフィルムで老人たちの日常の細部を撮影するため、建物内の天井に特設の枠を付け、ライトを設置した<sup>5</sup>。もちろん、羽田たちが看護師のように、老人たちのケアに直接参与していたわけではない。だが、創意工夫を凝らした撮影・録音方法を編み出し、モノの位置を調整する羽田たちの活動にも、老人たちの生活のかたちに寄り沿う映画制作の方法が模索されたという意味で、「ケアのロジック」の作動を見出せるのだ。

声や光の調整作業は、家族と離れて暮らす高齢者たちの

姿を、気の毒で悲惨な状態として、あるいはただ「弱者」として表象するのではなく、いわばその存在の輝きに迫る試みでもあった。羽田は、天井に照明をセットした企図について、次のようにも述べている。

それから、いまは高感度のフィルムが出てますから、本当じゃそんなことをしないでもうつるんです。だけど、あその場で、へたをすれば非常に悲惨な画になっちゃうわけですね。だから、私は、とにかく映像は美しくなければいけないとカメラマンにもものすごく言ったわけです。映像が美しいというのは、人間の肌の色をきれいにだしてもらいたかったということですね<sup>6</sup>。

このような美しい映像とクリアな音声に映画が占められることで、病院で現実には繰り返される「もっとどろどろしたところ、すさまじいところ」が除去されること、それによって「記録映画としてつまらない」という評価に繋がりがねないことにも、羽田は自覚的だった<sup>7</sup>。山田宏一が指摘したように、「たてまえとしての客観性とか、男性のシーンを五十パーセント、女性のシーンを五十パーセントなどという、バランスとか平等をいっさい無視したリアリズム」<sup>8</sup>を貫いて、《痴呆性老人の世界》は、カメラの前の老人たちを見つめる。そうすることで、およそ「認知症」という言葉で一括りにするのが不当だと確信を得られるほど、多彩な、老人の姿や身振りを掬い取ること成功した。膝を立てた状態で座ったままゆっくりと廊下を無言で進む人、自分をまだ18歳の少女だと笑顔で告げる老人、ずっと食事をもらっていないのだと主張する人たち。彼女たちは、「群れとしての老年ではない、個としての老年」であり、ここでは「老いについての、安易な一括りの意味をはねつける映像の流れ」<sup>9</sup>が提示されている。時代的制約も認められるにせよ、病院で働く介護する人々も、そして、映画自体も、その個別の存在をいかにケアするかに注力しているのが伝わる。その個へのまなざしこそが、《痴呆性老人の世界》という作品に、現在もなお再見すべき価値を付与している。

個としての高齢者と向き合う営みとは、認知症の老人たちが生きているフィクションの世界や、現在と同期しないそのバラバラの時間に寄り添うことでもある。夫や家族、自分の名前さえも思い出せなくなった人が、百人一首をスラスラと暗

誦してしまう瞬間を、映画は息の長い二つのショットで捉えてみせる。正月前に病院で餅つきをはじめると、かつての習慣を呼び覚まされたのか見事な合の手を入れ、大活躍してしまう女性もいる。日々の記憶が解けていくなか、それぞれの人生で身体に染みわたった記憶が、行動や声を通して表現される。このような老人たちの身体的記憶のイメージは、老い衰えていくという、誰もがたどる生の直線的なプロセスから逸脱した思考にわれわれを誘う。もちろん、認知症自体は、その進行を緩やかにすることは可能でも、完全に止めることはできない不可逆的なものである。しかし、上記の老女たちの身振りは、記憶が摩滅していく状態でも、ある過去の時間が保存され、湧水のように再生される意味を、観る者に語りかけずにいない。こうした断片的記憶を纏い、他のさまざまな出来事を忘れていく状態を、気の毒で、悲惨な状態などと不用意に捉えることの貧しさを、《痴呆性老人の世界》は伝えようとする。



《痴呆性老人の世界》 写真提供：国立映画アーカイブ

映画を観るわれわれも、その羽田たちの思考に次第に共振していくだろう。さらに議論の射程を広げれば、認知症予防など早期の対策・介入を行い、健康を保ち、サクセスフル・エイジングを手にする事、そのような人生の終末期を迎えるのが幸福で、そこに向かうための「選択のロジック」の主体であるべきとする、現代の医療や市場原理のパラダイムを揺るがせるイメージを、《痴呆性老人の世界》は提示しているのではないか。羽田自身が、最初の病院で受けた衝撃のあと、次のように発想を改めることで撮影に臨めるようになったことを明かしている点は重要である。

日が経つと少しずつ最初の衝撃から抜け出していった。やがて、「痴呆になれば、本人は幸福なのではないか」とも思うようになったのである。人生は大部分の人にとって、苦しみや悲しみの印象が強いものではなからうか。それを忘れ果てることができるのは悪くないのではないか<sup>10</sup>。

ノンフィクション・ライターの野村進も、認知症がもたらす「救い」<sup>11</sup>の可能性に言及している。戦争のトラウマの記憶、訪れる死への恐怖および苦痛から解放された事例を挙げ、その否定的イメージを覆そうとする議論は、実は少なくない。しかし、認知症に「幸福」や「救い」という概念を重ねることに抵抗感をもつ向きも当然ありうるし、早急な結論で思考停止することは避けよう。羽田自身も上記の引用のあとに、「ほんとうは、こんなに単純なことではなかったのだが、それでも、この時は『痴呆になるのも悪くない』と思ったことで、ようやく撮影にたちむかえる気持になったのである」<sup>12</sup>と明記している。おそらく認知症の「幸福」というイメージもまた単純化を免れないことに、撮影を通して羽田は思い至つただろうし、だからこそ、高齢者の生とそのケアのあるべき姿をさらに取材するため、『安心して老いるために』などのその後の仕事に突き進んだと思われる。ここには安易な答えに縋らず、ケアの現実と課題に向き合い続けた、映像作家の倫理が認められねばなるまい<sup>13</sup>。

にもかかわらず、「絶望的な気持ち」におかれた羽田を映画に向かわせたその認識に注目したのは、認知症の老人たちを、社会的弱者として捉えて済ませるような考えから距離をとる転換、その一歩が刻まれているからである。「幸福」や「救い」という表現が正しいかどうかではなく、介護される老人たちを、気の毒な、弱者として見据えるのを一旦退けることで、新たな思考の地平が開ける。それが「ケアする映画」の原動力となったのだ。「もっとどろどろしたところ、すさまじいところ」を撮るべきとするスキャンダラスなドキュメンタリーとは真逆に、羽田たちはその老人たちの輝きを探し求め、可視化するため、撮影に必要な調整作業を繰り返したはずだ。

当初の撮影期間の終盤と思われる場面、カメラの前で一つのイメージが立ち上がる。お正月に自宅に帰ってきた老人たちが、次々と病院に戻ってくる。家族と過ごせて元気を取り戻した老人もいるが、逆に症状が悪化した人もいた。お墓

参りに行った先で自分が捨てられるのだと妄想に憑かれた老人もいたことをナレーションが告げる。自宅で家族に囲まれている時は、自分の名前さえ思い出せなかった老人が、病院に戻ると、はっきりと名乗れる姿も記録されている。こうした一人一人のエピソードを紹介したのちに現れるショットが、病院に帰ったばかりのある老人の手を、別の老人がそっと握り、ゆっくりと広間を横切って、座敷にある炬燵まで導くというイメージである。前半で病院の外を彷徨っていた老人と看護師の姿とは対照的な、その映像の二人の美しさは、言葉に尽くせない。観る者の心が動かされるのは、家族というユニットから切り離された認知症の老人たちが、このショットでは、一方的なケアの受け手であるどころか、時にケアを与え合い、相互に寄り添い合う存在でもあることを、明示しているからだろう。絶望から出発した羽田たちの試みは、家族でなく、病院のなかでただ互いに無関心に並んでいるだけでもない、このささやかなケアの共同性に辿り着く。

《痴呆性老人の世界》のエピローグでは、二年後に再び訪れた病院の様子が挿入される。改築された病院、陽光に照らされた庭で唄う老人たちを映した後、この期間で退所して自宅に戻った人、転院した人、車椅子の生活になった人、喋らなくなった人、そして、亡くなった人たちの存在を告げる。最後に映るのは、病院の浴場の光景である。老人たちが楽しみにしていたお風呂の環境も様変わりしていた。新たに導入された寝たきりの人が入浴するための設備は、利用者から「怖い」という不評の声が出たらしい。だから放置されたその機械の横で、いまだ看護師たちが、動けない老人たちの入浴をサポートしている。こうしてケアは続く。果ても終わらないのだ。

#### 註：

1. 羽田澄子『映画と私』晶文社、2002年、105頁。
2. 羽田澄子インタビュー「羽田澄子〈監督〉と語る——記録映画」山田宏一『映画とは何か——山田宏一映画インタビュー集』草思社、1988年、493頁。
3. アネマリー・モル『ケアのロジック——選択は患者のためになるか（叢書 人類学の転回）』田口陽子・浜田明範訳、水声社、2020年。
4. 羽田澄子インタビュー「撮影対象と信頼関係をつくる」金

子遊『ドキュメンタリー映画術』論創社、2017年、32-33頁。

5. 同上、33頁。
6. 「羽田澄子〈監督〉と語る」前掲書、501頁。
7. 同上、507-508頁。もちろん映画に登場した老人の家族に対する配慮もある。撮影はできたが、「親族の方がどうしても映画として見せるのはいやだとおっしゃったために、本当に惜しいけど、はずしたおばあさんの話」（同上）もあったとされる。
8. 同上、510頁。この羽田の「リアリズム」は「註13」で触れる羽田のドキュメンタリーの手法、あるいはその「倫理」と重なるアプローチとして、厳密に把握されねばならない。
9. 天野正子『〈老いがい〉の時代——日本映画に読む』岩波新書、131頁。
10. 羽田澄子「映画『痴呆性老人の世界』をつくって」『老いの発見2 老いのパラダイム』岩波書店、1986年、66頁。
11. 野村進『解放老人——認知症の豊かな体験世界』講談社、2015年、131頁。
12. 羽田「映画『痴呆性老人の世界』をつくって」前掲書、67頁。
13. あえて「倫理」と書いたのは、かつて土本典昭が次のように評した羽田のドキュメンタリーの手法を強調したかったためである。「その映画の根本に現実の一線一角をゆるがせにしないドキュメンタリーの手法がある。それを「私」の眼でデフォルメすることへの厳しい抑制が働いている。自分の感覚への甘えと<sup>きよごう</sup>倨傲が微塵も働いていない」（土本典昭『不敗のドキュメンタリー——水俣を撮りつづけて』岩波現代文庫、2019年、215頁）。《薄墨の桜》（1977年）や《早池峰の賦》（1982年）などにも明瞭に認められるこの羽田の方法については、別稿でさらに論じたい。

たなか しんぺい／国立国際美術館客員研究員

第24回中之島映像劇場  
ケアする映画をたどる—配布資料をウェブに再掲  
発行：国立国際美術館  
資料発行日：2023年3月18日